

収蔵品に光を当てる——世田谷美術館の場合

時に華やかな企画展に埋もれてしまいがちな美術館の収蔵品展示。

だが調査・整理がなされた収蔵品の幅広さと厚みにこそ、その美術館の風格と真の存在価値が宿るともいえる。

地域に根ざしたユニークな活動を続ける東京・世田谷美術館を例に、その活用法を探る。

1986年にオープンした世田谷区立世田谷美術館は、あと数年で開館40周年を迎える。緑多い都立砧公園の一角に位置し、開館当初はフレンチレストランも併設。行政の直営ではない財団運営によるあり方が新鮮で注目された。

美術館とは？と問えば、一般来館者は華やかな企画展を真っ先に思い浮かべるのでないだろうか。お子さんがいれば、創作教室やワークショップなどの教育普及事業かもしれない。しかし、なかなか見えにくい部分ではあるが、美術館活動の重要な柱の一つに作品の収集・保管とその公開がある。世田谷美術館の場合、洋画家の向井潤吉、宮本三郎、清川泰次といった作家の、区内のアトリエに遺された全作品と関連資料の寄贈を受け、美術館の分館として整備。これら3館を含む収蔵作品は約18,000点にも及ぶ。この作品点数と3館もの分館の運営は、地方自治体の美術館としては極めて珍しいものなのだ。

従来の収蔵品展からの転換

実は世田谷美術館も開館から十数年は、収蔵品展に労力を割くより、話題作を描えた企画展に人や予算を投入していた。時代はバブル真っ最中だった。だが、その方向性を見つめ直す必要が出てくる。そう、バブル崩壊で経済状況が芳しくなくなり、企画展が思うように組織できなくなったのだ。近年でいえば、東日本大震災とコロナ禍も同様である。海外から作品が借りられず、展示も輸送も思うようにならないとなれば、収蔵品を活用するしかない。

幸い毎年のように、多数の作品が収蔵されている（ほとんどが寄贈）。近年では資生堂名誉会長・福原義春氏による約

400点もの駒井哲郎(世田谷ゆかりの作家)の版画コレクションなどもあった。こうして拡充を続ける収蔵品を活かす展示会のあり方について、これまで多様なアプローチが試みられてきた。とりわけ2004年に酒井忠康館長(元・神奈川県立近代美術館館長)が着任して以降、従来にも増して企画性が高くなったようである。2009年には館長の意向で「収蔵品展」という呼称を「ミュージアム コレクション」(以下コレクション展)に変更。現在は1階の展示室(約1,000㎡)を主に企画展示会場とし、収蔵品展用には2階の展示室(約780㎡)が充てられている。

多彩な切り口で収蔵品を紹介

ここで今まで開催したコレクション展の中から、幾つかを紹介してみたい。まずは、2013年に初めて実施した「気になる、こんどの収蔵品」シリーズである。これは数点だけ寄贈を受けた作品などを効果的に紹介しようという試みだ。作品にまつわる物語、つまり収蔵の経緯や作品の来歴に関して、作者略歴と併せて500文字程度の解説パネルを作成し、作品に添えて展示するというもの。バラバラと脈絡なく作品が並んでいても、これならさほど気にならない。館長の命名により、このタイトルとなった。おかげさまで展示は、寄贈者と鑑賞者の両方からとても好評だった。人は作品からだけで

なく、物語にも感動するものなのだ。これからこの展示会は5～6年間隔で開催していくつもりだ。

また「美術家たちの沿線物語」展は、世田谷を通る鉄道を機軸に、沿線に住んだ作家を紹介するというものである。関東大震災をきっかけに東京の郊外として発展した世田谷には、画家たちが広げて安価なアトリエを求めて沿線に住み始めた経緯がある。京王線・井の頭線/小田急線/田園都市線・世田谷線/東横線・大井町線・目黒線などで区全体を網羅でき、土地の歴史や地形に準じて線路が敷かれて街並みが形成されているため、都市論として考察の視野も広がる。2020年から始めたこの展示は既に2回を終え、ただいま「京王線・井の頭線篇」を開催中。2月からは最後の「小田急線篇」も始まる。

数十年展示されることのなかった、いわば忘れられた作品が展示候補として甦り、作品状態の点検機会となり、また作品や作家について再調査を行う格好のチャンスともいえる。さらにいえば、収蔵品展ではあるものの、新規に居住が確認されて収蔵作品がない場合などは特別出品を依頼して、作家と新たな関係を結ぶことにも貢献している。

展示室自体を展示

そしてもう一つ、近年、話題となった展示会に2020年の「作品のない展示室」がある。

コロナ禍の先の読めない状況の中、世田谷美術館も突然の休館を余儀なくされた。かつてない事態に直面した職員たちは、その運営の方向性について根本的な問い直しを迫られた。再開しても当初の計画からの大幅な変更は必須。この



「気になる、こんどの収蔵品 作品がつれてきた物語」(2020年) 展示風景。撮影：上野則宏

Susumu Yano

世田谷美術館学芸員。多摩美術大学芸術学科卒業後、世田谷美術館非常勤学芸員、世田谷文学館学芸員を経て、2009年から現職。主な企画展に、「瀧口修造と武満徹展」(1999年)、「誕生100年 映画監督・成瀬巳喜男」(2005年)、「花森安治と『暮しの手帖』展」(2006年)、「植草基一」(2007年)、「進める荒井良二のいろいろ展」(2009年)、「東宝スタジオ展」(2015年)、「ある編集者のユートピア」(2019年)など。



「作品のない展示室」(2020年)より。窓外にはパノラマのように砧公園の緑の景色(造園:野沢清)が広がる

時、収蔵品活用という話が真っ先に持ち上がったが、果たしてこれまでどおり、作品を展示することが正解なのだろうか。そういった疑問も当然起こった。この未曾有の事態だからこそ“美術館体験”とは何かを問うたとき、緑豊かな砧公園という自然と、それに包まれた美術館の“佇まい”を体験することが、作品の観賞よりも実は大切であり、ふさわしいと感じられるかもしれない——建築家・内井昭蔵がこの美術館に込めた想い、エントランスホール壁面に刻まれたラテン語のこぼれ「ARS CUM NATURA AD SALUTEM CONSPIRAT(芸術と自然はひそかに協力して人間を健全にする)」がそのアイデアを後押ししてくれた。

そこで展示室の大きなガラス窓から公園の緑が見えるように、長らく1階の展示室と庭を隔てていた仮設壁をすべて撤去。そして普段体験することのない空っぽの展示室を来館者に初めて公開したのだ。もちろん無料である。この試みは、来館者に新鮮であったばかりでなく、美術館職員の全てに自館の魅力を再認識させ、強く心に刻まれたはずだ。

収蔵品へのさまざまなアプローチは続く

もちろん筆者も今まで幾つかのコレクション展を担当してきた。近年では「音楽と美術」を切り口とする「ART/



「ART/MUSIC わたしたちの創作は音楽とともにある」(2021~2022年)会場風景。撮影:上野則宏

MUSIC わたしたちの創作は音楽とともにある」がその一つ。これは世田谷美術館も属する「せたがや文化財団」の音楽事業部が発行するニュースレター『せたがや音楽通信』に寄稿・連載していた、音楽にまつわる収蔵品を紹介するコラムから派生させたものだった。細野晴臣と横尾忠則が共にインド旅行に出かけて生まれた細野のLP「コチンの月」と収蔵する横尾の版画作品を展示したり、アマチュア作曲家でもあるアンリ・ルソーの作品、ミュージシャンとしても知られる大竹伸朗の作品などを紹介した。

あるいは、世田谷文学館での個展の際に縁を結んだ絵本作家であり、アウトサイダーアートに詳しい荒井良二をゲストキュレーターに迎えた「荒井良二のオールぶるっと!こんなに楽しい世田谷美術館の収蔵品」もある。荒井に自らの目で美術館の収蔵品をチョイスし、短いコメントを付けての展示を依頼。世田谷ゆかりの作家と素朴派、アウトサイダーアート、現代美術が混在する、なんとも



左:「荒井良二のオールぶるっと!こんなに楽しい世田谷美術館の収蔵品」(2022年)会場風景。右:草間彌生の作品に付した荒井良二の手描きコメントの一例。撮影:上野則宏

賑やかな展覧会となった。

こうして積み重ねてきた収蔵品展に関する問い直しの試みだが、今後、差し迫る課題は、2万点に迫る膨大な作品群を次世代にどのように引き継いでもらうかだ。個々の作品には、来歴や入手の経緯、取り扱い方、展示方法などの情報が付随する。だが、データベースが本格的に稼働したのは15年ほど前。今ようやく各自がPCから収蔵品管理システムのデータベースにアクセス可能となり、情報の共有化が格段に進んではきた。今後、これをどのように活かしていけばよいのであろうか。

目下のところ筆者は、『暮しの手帖』の編集長でデザイナーでもある、花森安治の電車の中吊り広告や新聞広告に着目し、アートディレクターとしての花森安治の仕事を再考する展示を企画中である。そこでは新収蔵となるアートディレクター・大貫卓也の「としまえん」の駅貼りポスター(B0サイズ)を並置することを考えている。そうすれば、意表を突くユニークな広告デザインの面白さだけでなく、広告デザインの奥深さを知ることになるはずだ。

コレクション展への挑戦は、これからも引き継がれていく。そして同時に、絶え間なく生まれる一つ一つの小さな物語をデータベース化し、編み直してつなぐ営みもまた、静かに続けられるのである。

